

INDIA & JAPAN 時空を超えて、南インドと九州を結ぶ



Sarasvati

サラスヴァティ 03

● 発行人／坂田マルハン美穂 ● 発行元／ミューズ・クリエイション (NGO) ©2026 Muse Creation 2026年9月



バンガロールを拠点に世界各地で活躍するダンサーRukmini Vijayakumar。彼女が率いるダンスカンパニーによる『The Goddess』を、間近に見た。聖なる女性性をテーマに、ドゥルガー女神の優雅さや、カーリー女神の猛烈なエネルギーをインド古典舞踊であるバラタナティヤムをベースに表現した群舞。Rukminiが、カーリー女神へと変貌し、カッと目を見開いて舌を出す様子は、まさに神がかっていて迫力満点。圧倒的な美しさだった。



神と仏と、日本とインド

9月。祝祭が重なる時節の到来。

- ❖ 「サラスヴァティ」とは、学問や音楽、芸術、弁舌などを司るヒンドゥー教の女神で、日本の「弁才天」の起源です。
- ❖ 「ミューズ」とは、ギリシャ神話に登場する芸術や文芸、学問、歴史、天文学などを司る9人の女神の総称。ミュージックやミュージアムの語源です。

www.museindia.org

ミューズ・クリエイションは、日本とインドの文化交流や地域社会への貢献を目的に、2012年、坂田マルハン美穂によって創設された慈善団体です。

～神と仏と、日本とインド～

1. 9月に思うこと
2. 象の頭を持つガネーシャ神のおまつり
3. 日本における信仰の歴史①
4. 日本における信仰の歴史②
5. 日本に根付いたインドの神々
6. 日本に息づくインドの影響
7. インドの仏教聖地を巡る旅
8. 福岡の中のインド
9. 般若波羅蜜多心経
10. 旅するミュージズ／シンガポール
11. 9月にまつわる個人的な体験



From the Editor 9月に思うこと

ホリデーシーズンの到来に際して。信仰を通して、インドを知る。日本を知る。

駐在や移住などでインドに暮らしはじめた日本人に対し、約20年にわたってインドの生活習慣や文化、歴史、ビジネスなど多彩なテーマでの講演やセミナーを実施してきた。日本とは著しく異なるインドの習慣や常識に、当初は理解や受け入れが困難なケースも少なくない。わたし自身、自分の意志でインド移住を決めたものの、思い通りに物事が運ばない生活に、戸惑い、怒り、疲弊し、途方に暮れることは、頻繁にあった。

特に「時間厳守」を尊ぶ多くの日本人にとって、スケジュールの遅れは大きなストレスになる。ゆえにわたしは日本人に対し、インドは「週休3、4日制」で成り立っているという前提で、予定や予算を立てることを推奨してきた。加えて、余剰人員の確保も不可欠だ。日本の常識に従って人件費削減や少数精鋭を目指す、現場は間違いなく破綻する。インドには、仕事よりも尊ばれるべき大切なことがたくさんあるからだ。それは宗教の祝祭であり、家族の看病や病院への付き添いであり、親族や親しい人々の結婚式であり、時にはクリケットのワールドカップ観戦であったりする。この国で生活をさせてもらっている以上、インドの「当たり前」を理解しつつ、振り回されないように自身の「体幹」を鍛える必要がある。その上で、この国の文化習慣を受け入れ、善い面に触れ合い、その独自性を楽しむことができれば、日常生活はぐっと豊かになるだろう。

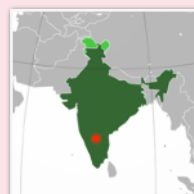
今年も9月に入った。ここから年末にかけてのインドは、お祭り気分が加速する。ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教、シク教、仏教、ジャイナ教、ゾロアスター教……と、多様な宗教が共存しているインドでは、この時節に各宗教の祝祭が集中するのだ。加えて結婚式シーズンも到来する。ゆえにわたしは、このホリデーシーズンにおいては「週休4、5、6日制だ」と考えるべしと伝えている。大袈裟だと思われるかもしれないが、そう割り切って物事の優先順位を決め、予定を立てる方が賢明だ。日本基準のまま無理をするとストレスが溜まるだけでなく、作業効率も落ちる。いまだに日本人気質が抜けずせっかちな自分に対し、わたしは「急がば、回れ」「急いては事を仕損じる」を、呪文のように唱えている。

ところで、かつてのわたしは「日本人にインドを伝える」機会が多かったが、COVID-19パンデミックが明けてからは「インド人に日本を伝える」講演や展示会が中心になった。日本に関心を持ち、文化や伝統、食生活、観光情報を知りたいという友人知人たちが急増したのだ。ベンガルール国際空港から成田への直行便が就航したことも理由のひとつだろう。実際、2019年の訪日インド人旅行者数は年間約17万6,000人だったが、2026年は上半期だけで21万人を突破している。そんな中、日本を伝えるに際して、わたし自身が日本を学ぶ必要性を痛感した。日本を離れて30年。海外にばかり目を向けていた若いころのわたしは、母国の伝統文化への興味関心が薄かった。ゆえに、本誌の創刊号のテーマでもある「原点回帰」を目指し、最近になって改めて、母国を探求し始めたのである。

日本とインドの関係史をはじめ、茶道やテキスタイル、食文化、建築、陶磁器など、テーマ別の英文資料を作成して講演したり、日本の伝統的な着物や帯、工芸品の展示会を開催したりと、ここ数年は精力的に日本を学び、伝えてきた。その過程において、日本とインドを繋ぐあらゆるテーマの根底に、神や仏の存在があることに気づいた。神社と寺院の違いを尋ねられたとき、「神道が神社」「仏教が寺院」と答えるだけでは見えてこない、複雑で深い歴史の経緯がある。日本を訪れたインドの友人から「なぜヒンドゥー教起源の神が寺院で祀られているの?」「なぜサンスクリット語（梵語）が刻まれているの?」「日本でもヒンドゥー教が信仰されているの?」などと尋ねられるにつけ、それまでは「そういうものだ」と見過ごしていたことに対する疑問が次々と湧いてきた。そして、その背景を調べるにつけ、自分がいかに日本の歴史を知らなかったかに気付かされたのだ。今号では、わたし自身がこれまで学んだ過程で驚き、感銘を受けたエッセンスを、なるたけわかりやすくまとめた。編集しながらも、新たに知ることが多々あり、刺激的な時間でもあった。日本とインドの相互理解を促す上で、有意義な一冊になったと自負している。両国の深い繋がりに触れ、楽しんでいただければ幸いだ。

バンガロールと福岡。「ふたつの故郷」を結ぶ情報誌『サラスヴァティ』

『サラスヴァティ』は、日本とインドの相互理解を促す目的で、2026年7月に誕生した月刊誌です。特に、発行人の故郷である九州の福岡と、第二の故郷であるバンガロール（ベンガルール）を結ぶことを願い、この二都市周辺の情報を積極的に紹介しています。福岡とバンガロールの共通項など詳細は、創刊号（1号）の2ページをご覧ください。



象の頭を持つガネーシャ神のおまつり

●人気の神様、ガネーシャとは

象の頭をしたヒンドゥー教の神様「ガネーシャ」。誕生背景にはいくつかの逸話がある。一説によると、女神パールヴァティーが自分の身体垢を集めて粘土のように捏ね、少年の人形を作って命を吹き込み、自分の息子にした。ある日、彼女が入浴する際、彼に見張りを頼んだところ、パールヴァティーの夫であるシヴァ神が帰宅。息子は彼を父親だと知らずに行く手を阻んだため、シヴァは激怒して彼の首を切り落とした。お風呂から上がったパールヴァティーがこれを知り、嘆き悲しんだことから、シヴァは部下に「北を向いて眠っている動物の頭を切って持ってこい」と命じる。部下が持ち帰った象の頭を少年の身体にくっつけて蘇らせ、ガネーシャが生まれたという。

ガネーシャは小さなネズミを乗り物にし、手には自分の牙を折って作ったペンや蓮の花を持つ。甘いお菓子も大好きだ。一見すると、風変わりな姿だが、その身体各部には、深い意味がある。象の頭は偉大なる高い知性の象徴であり、人の話をよく聞くための大きな耳と、物事の本質を見抜く小さくも鋭い目を持つ。大きなお腹は、宇宙を飲み込むほどの寛大さを表し、欲望や邪念を象徴するネズミに乗る姿は、欲望をコントロールする心の強さを示す。

4本の手の持ち物にも、各々に意味がある。蓮の花は純粋や悟りを、お菓子は善行により得られる至福の報酬を、斧や縄は悪縁を断ち切り信者を正しい道に導くことを意味する。中でも、わたしが好きな持ち物は右手の牙。インド二大叙事詩のひとつ『マハーバーラタ』の著者である聖仙ヴィヤーサの口述を、ガネーシャは筆記したとされる。その際、途中でペンが壊れたため、自分の牙を折り筆記を続けたという。

●ガネーシャ・チャトルティーとは

ガネーシャ・チャトルティー (Ganesh Chaturthi) とは、ガネーシャの誕生を祝うヒンドゥー教のおまつり。「チャトルティー」とはサンスクリット語で「4日目」を意味し、新月から数えて4日目の吉日を指している。今年は9月14日から25日までの12日間にわたって開催される。

初日に、ガネーシャ像を飾る。家庭では粘土などで作った小さなものを、地域コミュニティや町内会では、櫓を組んで、大きなアイドル（神像）を飾る。特にガネーシャ・チャトルティーが盛大に行われるムンバイでは、ガネーシャ・マンダラと呼ばれるその特設のテントやステージがあちこちで見られる。我々夫婦は、夫の仕事の都合で2008年から2年間、ムンバイとバンガロールの二拠点で生活していたのだが、ガネーシャ・チャトルティーの賑わいは、今でも鮮やかに思い出す。町内会ごとに趣向が凝らされたガネーシャ・マンダラが見られ、それらを見比べながら散歩するのも楽しかった。

ただし、おまつり最終日のヴィサルジャンと呼ばれる川や湖、海への放流行事は、社会問題を伴う。日本の精霊流しのようなひっそりとしたものであればともかく、大量の巨大な像が、次々に流されるのだ。ムンバイでは、アラビア海に放流すべくいくつかのポイントがあり、そこを目指して各地からの車両が殺到、町中が大渋滞となる。海辺は人々で埋め尽くされ、歌って踊っての大騒ぎも加わり、壮絶の一言に尽きる。放流されたガネーシャ像による海洋汚染が懸念され、ここ数十年は、環境破壊を防ぐ「エコ・ガネーシャ」の新素材が普及。家庭では粘土に植物の種を埋め込み、水に流さず庭に埋めて緑を育てる「シード・ガネーシャ」が昨今のトレンドだ。



ガネーシャ・チャトルティーを祝うマイソールの友人夫妻。ShruthiとPavan



今年は夫婦揃って粘土でのガネーシャ作りに初挑戦した。牙のペンで文字を綴るガネーシャの姿だ。童心に返って熱中、楽しかった！



タミル・ナドゥ州の聖地、ティルヴァンナーマライにて。ガネーシャ・チャトルティーのために準備された偶像

福岡でも出合えるガネーシャ神たち

福岡でもガネーシャ神の姿を見ることができる。（写真左から）2021年、福岡市博多区の「吉塚市場リトルアジアマーケット」に降臨したガネーシャの石像（撮影／入江真樺）。福岡市早良区百道浜にある福岡タワー正面付近には、ガネーシャをはじめとする10体のインドの神像が並ぶ。これらは、1989年の「アジア太平洋博覧会（よかトピア）」に展示すべく、インドから運び込まれた。閉幕後は、友好の証としてインド政府から福岡市に寄贈された。



日本の信仰を遡ると、インドの影響が浮かび上がる

原始／古代 人類誕生～12世紀末

●アニミズム（自然崇拜）／縄文時代～

山や川、石、樹木や森など、あらゆる自然物、無機物に靈魂や精霊が宿っていると、日本人の信仰の最も原初的な世界観。

●古神道／弥生時代ごろ～

アニミズムを背景とした日本固有の自然信仰。祈りの対象は無限の神々、即ち「八百万（やおよろず）の神」。当時は社殿を持たず、山や巨岩など自然そのものを神聖視して崇めた。

●天照大神（太陽神信仰の皇祖神化）

古くからの「太陽神」信仰が、大和朝廷による日本統一の過程で、皇室の最高神・祖先神（皇祖神）として位置づけられた。

●仏教伝来／飛鳥時代

538年、もしくは552年、朝鮮半島の百濟から仏教が公式に伝わる。自然を崇める従来の信仰と、仏像や経典を持つ外来宗教の出会い。

●崇仏・廃仏論争と聖徳太子の台頭

仏教の受け入れを巡り、崇仏派の蘇我氏と廃仏派の物部氏が激突。蘇我氏側で参戦した聖徳太子は、勝利後に法隆寺などを建立。十七条憲法で「仏教を敬うこと」を国の方針とした。同時に従来の神々も尊重したため、のちの「神仏習合」へとつながる共存の土台が作られた。

●『古事記』『日本書紀』の編纂／奈良時代初期

712年に『古事記』、720年に『日本書紀』が完成。天照大神を頂点とする神々の物語が文字として公式に記録され、天皇による国家統治の正統性が明文化された。

●鎮護国家／奈良時代

仏教の持つ神秘的な力によって国を安定させ、災害や争いから守ろうとする政策。聖武天皇による東大寺大仏の建立などがこれに該当する。

●神仏習合／奈良時代～江戸時代

日本固有の神と外来の仏を融合した現象。建物を持たなかった古神道は、仏教の豪華な寺院に影響され、神の家である「社殿（神社）」を建てはじめ、人間の形の「神像」を彫るようになった。神社内に寺を建てる混交も進み、やがて「日本の神は、仏が人々を救うために仮の姿で現れたもの」とする「本地垂迹説」へ発展。神と仏は完全に一体化した。

中世～近世 12～19世紀後半

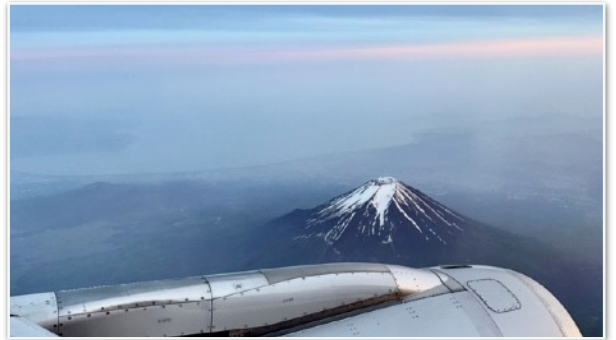
●鎌倉新仏教の普及とキリスト教伝来／鎌倉時代～

鎌倉新仏教により庶民への救済の道が開かれ、仏教が広く普及した。1549年にはキリスト教が伝来して急速に拡大するが、のちの幕府は統治の脅威とみなして切支丹禁制を敷き、弾圧へと転じた。

●寺請制度とご利益信仰の流行／江戸時代

キリスト教の排除と民衆管理のために寺請制度が導入された。一般の民衆をいずれかの寺の檀家とすることで、仏教は行政のシステムへと組み込まれた。戦乱の時代が終わり社会が安定した江戸中期以降になると、人々の関心は現世の幸せを願う「御利益信仰」へと移り、伊勢参りや四国遍路、さらには庶民の富士山参拝互助グループである「富士講」による富士登山など、旅の大流行を生み出した。

「生まれては神社に参り（神道）、結婚式は教会で（キリスト教）、死んだらお寺へ（仏教）」と喩えられる通り、日本人の信仰は特殊だ。インドを含む多くの国々において、宗教とは特定の経典や神を信仰することだが、日本は事情が違う。理由を探るべく歴史を辿ったら、今まで気づけなかった側面が見えてきた。



激しい噴火を繰り返した古代の富士山は、恐しくも聖なる山として遥拝（離れた場所から仰ぎみて拝む）されていた。富士山を信仰の対象にする神社の代表格は浅間神社。噴火が鎮まった11世紀ごろからは、仏教の修行者が自然の中に身を投じて悟りを開く「修験道」の聖地となった。写真は2024年、成田から福岡へのフライトにて撮影。実に美しかった。



浮世絵師、歌川国貞により1844年ごろ描かれた『岩戸神楽ノ起願』。弟の素戔鳴尊（すさのおのみこと）の乱暴に怒った太陽神の天照大神（あまてらすおおみかみ）が天岩戸に隠れたため、世界は暗闇に包まれる。困り果てた八百万の神々が岩戸の前で賑やかに神楽を奏して踊ったところ、何事かと天照大神がわずかに岩戸を開けて外を覗き、世界に再び光が戻った瞬間が描かれている。＊画像／歌川国貞「岩戸神楽ノ起願」（1844）Wikimedia Commons



南インド出身の僧侶である菩提僊那（ボーディセーナ）は、736年に遣唐使の要請を受けて日本へ渡り、福岡県の太宰府に上陸。その後、752年の東大寺の大仏開眼供養会で、聖武上皇の代わりとして「開眼導師」という重大な役割を務めた。＊画像／左は四聖御影（永和本）。中央が大仏の建立を命じた聖武天皇、右奥が菩提僊那。Wikimedia Commons／右は2026年奈良を旅した夫が撮影した東大寺の大仏

習合した神仏が分離。仏教の破壊と国家神道。そして戦後

明治、大正、昭和（戦前）19世紀後半～20世紀前半

●神仏分離／明治時代初期（1868年～19世紀後半）

明治政府が出した「神仏分離令」により、千年以上続いていた神仏習合が強制的に解体された。欧米列強に対抗できる天皇中心の中央集権国家（王政復古）を築くため、天皇の権威の根源である「神道」を国教化しようとしたことが最大の理由。この政治的な目的のために、神社から仏像や經典が排除され、神と仏は法的に完全に引き離された。

●廃仏毀釈／明治時代初期（1868年～19世紀後半）

神仏分離を機に巻き起こった、全国的な仏教破壊運動。政府の意図を超えて民衆や神職が暴徒化し、江戸時代の寺請制度（檀家制度）で特権化していた寺院への不満も爆発した。全国で多くの寺院が取り壊され、貴重な仏像や經典が破壊、焼却される、日本史における大惨劇のひとつ。

●国家神道／明治時代中期～昭和（～1945年）

明治政府は欧米列強に対する不平等条約の改正や近代国家としての体裁を示すため、大日本帝国憲法において「信教の自由」を規定した。その一方で、神社は宗教ではなく国家の祭祀、道徳であるとする「神社非宗教論」を構築。これにより、宗教の枠外として国民全員に神社参拝を義務づけた。戦争へと向かう時代の中で、神道は天皇への忠誠と国民統合を果たすための、強力な精神的支柱として政治利用された。

戦後～現代 1945年～現在

●政教分離／1945年～

敗戦直後の1945年12月、GHQが発した「神道指令」により国家神道体制が完全に解体された。国家が特定の宗教を優遇したり国民に信仰を強制したりすることを禁じる「政教分離の原則」が日本国憲法に明記され、神社も政府の管理を離れ、一つの民間宗教法人となった。

●新宗教の流行／戦後～高度経済成長期

敗戦による価値観の崩壊や、高度経済成長に伴う大都市への人口集中の中で、地方から上京した労働者たちの孤独や不安を吸収する形で新宗教が爆発的に信者を拡大した。信者同士の強固な共同体や、現世での幸福を強調、戦後日本の社会や政治に多大な影響を与えた。

●オウム真理教事件と社会問題／昭和末期～平成初期

バブル経済期の物質的豊かさの裏で、精神的な充足を求めた若者層を中心に、瞑想や精神世界を掲げる「新新宗教」と呼ばれる教団が台頭した。しかし、その中の一派であったオウム真理教が次第に先鋭化し、1995年に地下鉄サリン事件をはじめとする一連の凶悪事件を引き起こした。この事件は日本社会に大きな衝撃を与えて深刻なトラウマを植え付け、新宗教全体の急速な衰退を招くことになる。昨今の日本における宗教全般への強い警戒心や不信感を抱かせる要因のひとつとなった。

●信教の自由と現在

オウム真理教事件以降の宗教不信に加え、近年の旧統一教会を巡る社会問題などを経て、新宗教への警戒感が高い。昨今におけるソーシャルメディアなどでは「宗教」という言葉自体が否定的に捉えられる傾向もある。その一方で、現代の日本人は、節目や祭事の際には神社仏閣を訪れ、クリスマスを楽しむなど、柔軟で軽やかな信仰心を備えているともいえる。古来からの聖地をパワースポットとして尊ぶ感性も、形を変えながら健在だ。特定の教義を信じるという意味での宗教からは距離を置きつつも、八百万の神への畏敬や、先祖への感謝は、日本の伝統や文化、習慣の中に溶け込み、実践されている。ただ、個の時代が加速する今、倫理や道徳を学ぶ機会が減り、心の寄り添いは見定めにくい。



明治初期の神仏分離令を契機に、全国で仏教を排除する「廃仏毀釈」運動が激化した。これは当時の様子を描いた木版画。寺院から集められた經典や仏具がうず高く積み、燃やされている。多くの寺院が取り壊され、貴重な仏像や歴史的資料が破壊・散逸した世相を伝える作品。＊画像／横河秋濤『開化乃入口』（国立国会図書館デジタルコレクション）



●写真左／薩摩藩（鹿児島県）では徹底的な廃仏毀釈運動が展開された。藩内の全寺院が廃寺となり、無数の仏像や仏具が破壊された。これは日置市園林寺跡の仁王像。＊画像／デジ楽 ●写真右／イタリア系英国人の写真家フェリーチェ・ベアトが1868年に撮影した神奈川県の鎌倉市の鶴岡八幡宮。廃仏毀釈運動により、1870年、完全に破却された。＊画像／Felice Beato, Wellcome Collection(CC BY4.0)



1878年（明治11年）に描かれた浮世絵。手前には洋装の明治天皇と皇后、左右には神武天皇をはじめとする歴代の天皇、背後には日本神話の神々が配置されている。文字が読めない国民に対し「明治天皇は神々の血統を受け継ぐ尊い存在である」と視覚的に啓発する意図があった。新政府が推進した神道中心の国づくり（国家神道）や近代化をアピールするポスターのような役割を果たした作品。＊画像／楊洲周延『本朝拝神貴皇鏡』（玉川大学教育博物館所蔵）

日本に根付いたインドの神々

6世紀から9世紀にかけて、ヒンドゥー教に由来する数多くのインドの神々が日本に伝来した。その多くは仏教の守護神となり、如来や菩薩と並ぶ仏教の神格「天部（てんぶ）」として親しまれている。ここでは、代表的な9柱を選んで紹介する。



●梵天／ブラフマー

宇宙の創造主である最高神ブラフマーが起源の守護神。宇宙万物の根本原理を神格化した絶対的な存在。仏教においては、釈迦が悟りを開いた際、説法を促し（梵天勧請）、仏教が広まる契機を作った。仏教の世界観を支える中心的な存在。写真は唐招提寺金堂の木造梵天像。

●毘沙門天／クベーラ

富と財宝の神、クベーラが起源。多聞天とも呼ばれる武神だ。仏教における四天王の一神で、七福神の一柱でもある。甲冑を身にまとい、怒りの表情をした武将の姿で表現される。勝負運や金運、家内安全をもたらす。写真は福岡県太宰府市「観世音寺」の提供。



●吉祥天／ラクシュミー

美と繁栄の女神ラクシュミーが起源。母は鬼子母神、夫は毘沙門天。気高く美しい天女の姿で表され、左手には願いを叶える「如意宝珠」を持っている。七福神に加えられ「八福神」として信仰する地域もある。写真は福岡県太宰府市「観世音寺」の提供。



●大黒天／マハーカーラ

シヴァ神の異名である「マハー（大いなる）カーラ（暗黒）」が起源で、七福神の一柱。そもそもは憤怒相の軍神だったが、中国では財福の神として信仰された。日本では、音が同じことから「大国主」と混同され習合。やがて微笑みの相が加えられ、食物や財運を招く神に。写真右は福岡県太宰府市「観世音寺」の提供。左は我が家の博多人形。



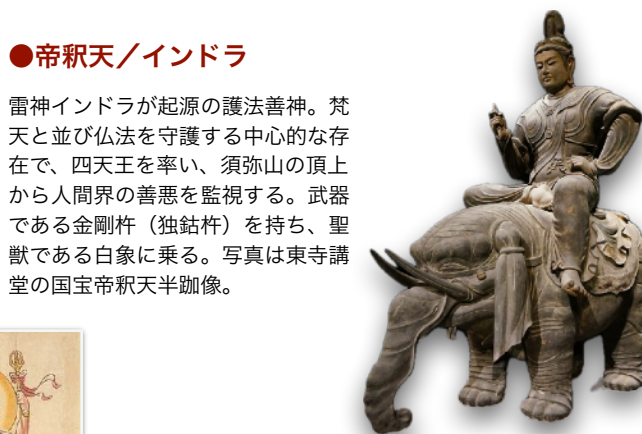
●馬頭観音／ハヤグリーヴァ

ヒンドゥー教の最高神ヴィシュヌの化身の一つ、あるいは「ハヤグリーヴァ（馬の首を持つ者）」という神が起源。馬が草を食むように人々の煩惱や諸悪を食べ尽くすとされ、日本では広く旅の安全や馬をはじめ畜生類の守護神とされる。写真は福岡県太宰府市「観世音寺」の提供。



●弁才天／サラスヴァティ

聖なる川を神格化した女神で、音楽、学問、智慧、弁説を司るサラスヴァティが起源。日本に伝わった当初は才能が尊ばれ「弁才天」と呼ばれたが、後に財福の神と習合したことから「弁財天」と書かれるようになった。わたしは敢えて「弁才天」と表記している。写真は我が家の博多人形。



●帝釈天／インドラ

雷神インドラが起源の護法善神。梵天と並び仏法を守護する中心的な存在で、四天王を率い、須弥山の頂上から人間界の善悪を監視する。武器である金剛杵（独鈷杵）を持ち、聖獣である白象に乗る。写真は東寺講堂の国宝帝釈天半跏像。

●大自在天／シヴァ

最高神シヴァが起源の護法善神で、サンスクリット名はマヘーシュヴァラ。世界の創造と破壊を司るシヴァ神の神格を引き継ぎ、仏教では三千世界を支配する最高神とされる。超越した力をして「大自在」と命名された。三目八臂（3つの目と8本の腕）を持ち、白牛に乗り三叉の矛を握る。写真は平安時代の仏像図集『図像抄』より。



●歓喜天／ガネーシャ

ガネーシャが仏教に取り入れられた守護神で「聖天（しょうてん）さま」とも呼ばれる。象の頭を持つ男女2体の神様が抱き合う「双身像」で、商売繁盛、金運、夫婦円満、縁結びなど、現世利益の信仰が強い。強力な霊験ゆえに、「秘仏」として祀られることが多い。写真は、高野山真別所円通寺本『図像抄』より。

◆七福神（しちふくじん）

七福神は、室町時代末期に始まり江戸時代に定着した日本独自の信仰。唯一の日本固有の神（神道）である恵比寿に加え、インド（ヒンドゥー教／仏教）由来の大黒天、毘沙門天、弁才天、中国（道教／仏教）由来の福祿寿、寿老人、布袋尊という、3カ国の異なる宗教背景を持つ7柱の神々で構成されている。仏教經典の「七難即滅、七福即生」に由来し、商売繁盛や健康長寿など人々の現世利益を全方位で叶える存在として、現代も全国的に親しまれている。七福神が乗る「宝船」は、海の彼方から福がやってくるという日本の古い信仰に由来する縁起物。船の帆には「宝」の文字や長寿を象徴する鶴や亀が描かれ、船首は龍や鳳凰をかたどることもある。打出の小槌や金銀財宝、豊作を表す米俵などを積み、初日の出を背景に、大海原をこちらへ向かって進んでくる構図で描かれる吉祥画が有名。写真は太田佳伸画伯による七福神。



宮島発祥の「しゃもじ」。その起源は弁財天の琵琶だった



(写真左から) 宮島のしゃもじは「幸せをめしとる(飯とる)」という語呂合わせから、縁起のいい土産として江戸時代から愛されている／厳島神社の大鳥居と夫／福岡市東区宗栄寺の名島弁財天にある宮島の大きなしゃもじ／同区香椎宮の弁財天。抱えている琵琶が、まさにしゃもじの形状

2012年11月、夫と日本を旅した際、広島県の宮島に1泊した。宮島は、古来から「神の島」として崇められている日本三景の一つだ。自然への畏敬から、浅瀬に建立された厳島神社と大鳥居は、潮の干満によりその景観を変える。夕刻、ロープウェイに乗った。中空から見下ろす世界遺産の「弥山原始林」や瀬戸内海の島々の絶景に感嘆したものだ。夜の干潮時には大鳥居の足元まで歩き、幻想的な情景に見入った。宿では宮島ビールで乾杯し、名物の牡蠣やアナゴ料理を楽しんだ。

翌朝、目抜き通りを歩いているとき、巨大なしゃもじが目に見え、飛び込んできた。宮島がしゃもじ発祥の地だということ、そのとき初めて知った。江戸時代、暮らしが困窮していた島民を

救うべく、誓真という僧侶によって考案されたのだという。ある夜、誓真の夢に、宮島に祀られている弁財天が現れた。彼女が持つ琵琶の形に着想を得て、しゃもじの形状が閃いたという。宮島の御神木を使って杓子を作る木工技術を島民に伝え、それが現在に至る宮島の産業に発展した。島の随所で、サクラやトチ、クワ、ケヤキなどのしゃもじが売られていた。

弁財天の起源であるヒンドゥー教の女神、サラスヴァティが奏でる楽器は「ヴィーナ」。それが転じて「琵琶」となり、日本人の主食である「ご飯」をよそう独特の形状に結びついた。日本とインドのご縁の深さを思わされる逸話のひとつだ。島を離れる前、小雨の中、弁財天を訪れ、手を合わせたのだった。

菅原道真公を祀る「天満宮」と「牛」の関係

神社とは、本来、神々を祀る場所だが、中には実在した人間を祀る場所もある。9世紀末から10世紀にかけて実在した学者であり外交官、政治家だった菅原道真を祀る「天満宮」はその代表格だ。彼の墓所である福岡県の太宰府天満宮を筆頭に、全国に約1万2000社が存在する。菅原道真は「学問の神様」として、全国で広く信仰されているが、その背景には「無実の罪による死」と「人々の畏怖」があった。道真は非常に優秀で高い地位に登り詰めたが、それを妬んだ人々による陰謀により、無実の罪を着せられ、京都を追われた。

東風吹かばにほひおこせよ 梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ

これは、道真が京都から大宰府へ左遷されるとき、庭の梅の花を惜しんで詠んだ別れの歌だ。この梅には、主人を慕って大宰府まで飛来したという「飛梅(とびうめ)伝説」がある。

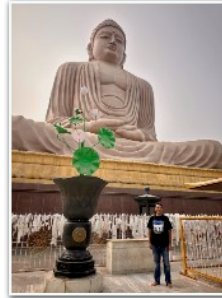
流刑同然の暮らしを強いられた道真公は、左遷から2年後、失意の中で亡くなった。彼の死後、都では激しい落雷が何度も発生し、道真を陥れた貴族たちが次々と急死した。疫病や干ばつも続いたため、当時の人々は「道真の魂が雷神となり復讐している」と恐れた。朝廷は、彼の怨霊を鎮め国の守護神になつてもらうため神社を建てて祀った。これが天満宮の始まりだ。



写真左と中央は福岡市中央区天神にある水鏡天満宮。左遷された菅原道真公が自分の姿を水面に映した故事に因む。「天神」という地名の起源になった社だ。右は2012年、母と太宰府天満宮の臥牛

天満宮の境内には「横たわる牛の像(臥牛)」が置かれている。道真が丑年だった、死んだ日が丑の日だった、遺骸を載せた牛車が動かなくなった場所に墓を建てた……と諸説あるが、インドとの関わりもある。道真公が神格化された際、「天満大自在天神」という神としての最高位の名前が贈られた。この「大自在天」とは、ヒンドゥー教の最高神である「シヴァ神」が仏教に取り入れられた姿だ。インドのシヴァ神が聖なる牛(ナンディ)を乗り物にしていることから、天満宮でも「牛」が神様の使者として聖視されるようになったという説もある。

仏陀の足跡を辿る旅路にて、インドの中の日本を見る



(左から時計回りに)「印度山日本寺」にて、駐在僧の中野蓮音さん(祐天寺)とノブータンのターラ女神寺院/マハーボーディ寺院(Rohit Sharma / CC BY-SA 4.0) / 1989年、日本の大乗教により建立された「インド大仏」

●ナールンダからラージギルへ。祖母とインドとのご縁

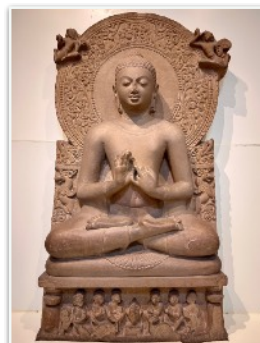
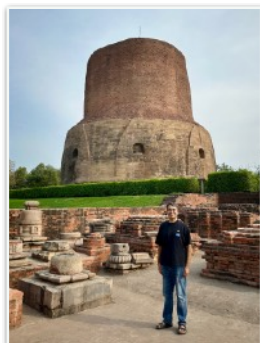
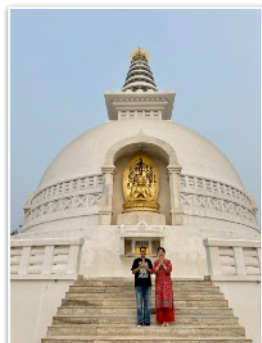
2026年3月。インド移住21年目にしてようやく、わたしは北インドの仏教にゆかりある地を巡る機会を得た。バンガロールから直行便で、ビハール州パトナへ飛ぶ。まずは空港から車でナールンダ大学遺跡(5~12世紀末)へ。仏教学をはじめ医学や数学、天文、音楽などを学べた世界最古の大学のひとつで、中国の玄奘(三蔵法師)が留学したことでも知られる。

その後、仏陀が仏教を布教したラージギル(王舎城)へ移動。わたしの父方祖母と深い関わりのある日蓮宗の「日本山妙法寺」を訪れた。小此木上人とお会いし、創設者である藤井日達上人と祖母が写る古い写真をお見せするなど、貴重なひと時を過ごした。翌朝は仏陀が法華経などを説いたという霊鷲山(りょうじゅせん)に登り、山頂で般若心経を唱えて瞑想。さらに日本山妙法寺の仏舎利塔を訪れ、合掌する。最後に竹林精舎をに立ち寄り、ラージギルをあとにした。祖母とインドのご縁については、別の機会に改めて記したい。

●仏教国博覧会。ブッダガヤで仏教国の縮図を見る

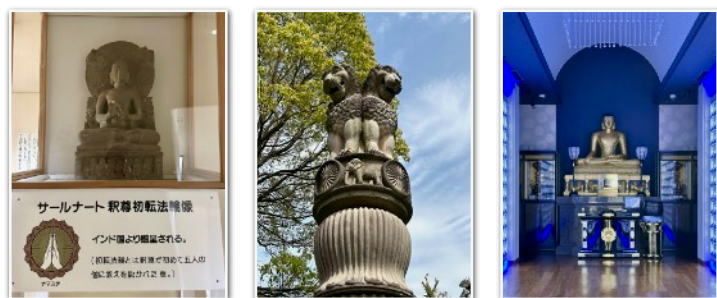
次に訪れたのはブッダガヤ。釈迦が悟りを開いた場所に立つマハーボーディ寺院(大菩提寺)が有名だが、この地は60を超える仏教寺院や僧院を擁する。1956年、ネルー首相は「仏教2500年祭」に際しブッダガヤを世界平和と宗教融和の国際的な拠点とすべく、各国に協力を呼びかけた。ネルー首相は日本にも依頼したが、日本政府は新憲法の政教分離原則から公式に応じることができなかった。そのことを残念に思った薬師寺の橋本凝胤をはじめとする僧侶たちの尽力により、1973年に「印度山日本寺」が誕生した。宗派の違いを超え、多くの仏教団体が賛同し、学界、財界、民間が協力したという。敷地内には鐘樓堂や保育園(福祉施設)もある。純日本風の木造寺院建築による本堂に足を踏み入れるや否や、懐かしい安息感に包まれた。タイ、スリランカ、バングラデシュ、カンボジア、ネパール、チベット、ブータン、ミャンマー、ヴェトナム、中国、台湾、韓国、日本。ブッダガヤは仏教国博覧会のような聖地だった。

*2026年3月の旅(ナールンダ、ラージギル、ブッダガヤ、サルナート、バラナシ)を記録したブログ <https://x.gd/b7Kkf>



(左から) ナールンダ大学遺構/ラージギルの霊鷲山にある日本山妙法寺の仏舎利塔/ウッタル・プラデーシュ州、聖地バラナシから北東へ約10kmの場所にあるサルナートのダメク・ストゥーパ/サルナート考古学博物館。釈迦が悟りを開いた後、初めて5人の修道士に教えを説いた姿を表す『初転法輪釈迦如来像(初転法輪仏)』/インドの国章にも採用されているサルナートで発見された「アショカ王の獅子柱頭」

まるでインド。仏教聖地が再現された福岡の久留米成田山



●在福岡インド総領事館や「ナマステ福岡」へ

ここ数年、母の高齢化に伴って、わたしは年に2回、故郷の福岡に帰っている。今年の春も約1カ月滞在、インドに関わる場所を訪れたり、催しにも参加した。特に、2025年4月に開設されたばかりの在福岡インド総領事館を訪れ、タミル・ナドゥ州出身のラムクマール総領事とお会いできたのは光栄だった。総領事は、経済、先端技術、高度人材、文化交流などを軸に、九州とインドの関係を強化すべく精力的に活動されている。わたしもまた、今後、バンガロールと福岡を結ぶべく何らかのご協力ができればと申し出たのだった。このとき、ラムクマール総領事から、近々熊本市花岡山の日本山妙法寺を訪れる予定だとお聞きして驚いた。わたしも還暦を記念して、生まれ故郷の熊本県荒尾市と、祖母と深い縁がある熊本市花岡山の日本山妙法寺を訪れる予定でいたのだ。偶然に感謝しつつ、総領事ご一行の予定に合わせ、わたしも現地で合流させていただいた。

また、インドへ帰る2日前には、毎年開催されているインドのお祭り「ナマステ福岡」に足を運んだ。昨年はミューズ・クリエイションのブースを出してインドの手工芸品を販売した。今年はふらりと立ち寄り、総領事ご夫妻にご挨拶をしたり、ステージや出店を楽しんだ。そのとき偶然お会いした知人から、久留米市の成田山の写真を見せてもらって驚愕した。白亜の巨大な観音像の横に、先月訪れたばかりのブッダガヤのマハーボーディ寺院に酷似した建物が立っているではないか！これは見に行かねばと、翌日の最終日、福岡県久留米市へ赴いた。



写真は大本山成田山久留米分院明王院。左上からインドより寄贈されたサルナートの「初転法輪仏」と「アショカ王の獅子柱頭」／仏舎利が納められた納骨堂／高さ62mの救世慈母大観音像と平和大仏塔納骨壇

●1カ月前にインドで見た仏教の縮図が目の前に！

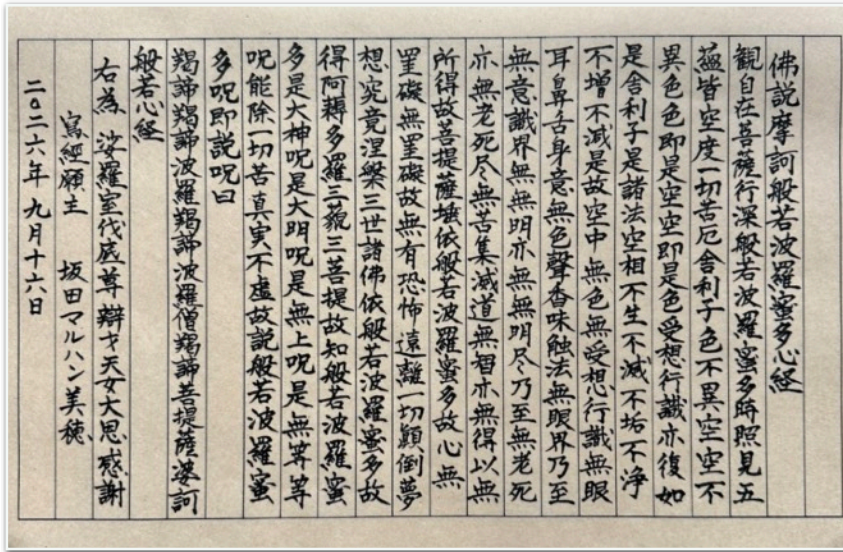
大本山成田山久留米分院明王院。そこには紛れもなくインド仏教の縮図があった。平和大仏塔は、ブッダガヤのマハーボーディ寺院の正式な建立許可を得て1997年に建立。周囲の約300体の釈尊像を含め、石材などはインドから送られたという。ミャンマーから贈られた仏舎利（ブッダの遺骨／遺灰）も納められている。また、釈迦が悟りを開いた場所にあった菩提樹の孫木が、スリランカから寄贈され、裏手に植えられている。インドの仏教聖地の真髄がここにある背景には、初代女性住職の金子妙福師の発願によるとのこと。救世慈母大観音像の内部は、らせん階段構造になっており、各フロアに仏教の世界観を表現する数々の貴重な展示が並ぶ。ただただ、圧倒された。

*2026年3～4月の日本旅（福岡市、八女市、久留米市、熊本県など）を記録したブログ <https://x.gd/cD8cq>



（左から）在福岡インド総領事館にてラムクマール総領事と／熊本市花岡山の日本山妙法寺の仏舎利塔。阿蘇誕生寺の行徳上人、ラムクマール総領事と／今年10周年を迎えたインド文化のイベント「ナマステ福岡」。写真は2025年の出店時に撮影／母校の福岡県立香椎高校にて、ファッションデザイン科の生徒たちにインドと日本のテキスタイル交流史を講演。インドから大量のサリーを持参し、着付け体験も楽しんでもらった

般若心經。262文字に凝縮された、空の教えと智慧の真髓



心の平穩を望むとき、あるいは祈り、感謝を込めて写経をする。瞑想の効果もある

● 般若波羅蜜多心經（般若心經）とは

『西遊記』の三蔵法師のモデルとして知られる唐代の僧、玄奘三蔵。彼は7世紀、仏法を求めて長安からインドへ旅立ち、17年以上の歳月をかけてサンスクリット語の膨大な經典を中国へと持ち帰った。帰国後、約20年を費やして漢訳した集大成が、全600巻からなる『大般若經』だ。わずか262文字のなかに仏教の真髓を詰め込んだ『般若心經』は、この膨大な大般若經の思想と深く響き合う經典で、觀音菩薩が弟子の舍利子（シャーリプトラ）に「空（くう）」の真理を説く形で展開する。すべての事象には固定的な実体（我）がなく、常に変化し続ける。だからこそ、あらゆる執着から心を解放し、平穩に生きよと教える。經典の締めくくりには、サンスクリット語の響きをそのまま漢字に写したマントラ（真言）が配されている。「ぎやてい ぎやてい はら ぎやてい はら そう ぎやてい ぼ じ そ わ か」。これは「往こう、往こう、彼岸（悟りの世界）へ往こう、完全に彼岸へ到達して、幸あれ」という意味だ。

Heart Sutra (Liberal translation by Thich Nhat Hanh)

Avalokiteshvara
while practicing deeply with
the Insight that Brings Us to the Other Shore,
suddenly discovered that
all of the five Skandhas are equally empty,
and with this realisation
he overcame all Ill-being.

“Listen Sariputra,
this Body itself is Emptiness
and Emptiness itself is this Body.
This Body is not other than Emptiness
and Emptiness is not other than this Body.
The same is true of Feelings,
Perceptions, Mental Formations,
and Consciousness.

“Listen Sariputra,
all phenomena bear the mark of Emptiness;
their true nature is the nature of
no Birth no Death,
no Being no Non-being,
no Defilement no Purity,
no Increasing no Decreasing.

“That is why in Emptiness,
Body, Feelings, Perceptions,
Mental Formations and Consciousness
are not separate self entities.

The Eighteen Realms of Phenomena
which are the six Sense Organs,
the six Sense Objects,
and the six Consciousnesses
are also not separate self entities.

上記は、世界的に有名なヴェトナムの禅僧ティク・ナット・ハン師により2014年に発表された般若心經の英訳。「空」を「無」ではなく、「全ては繋がりが合っている」と捉えている。わたしたちは、自然環境、他者など、無数の支えがあって存在しており、どれ一つ欠けても今の自分はない。「インタビューング（相互存在）」を意識することで、孤独や死への恐れから解放され、今を豊かに生きられると説いている。

The Twelve Links of Interdependent Arising
and their Extinction
are also not separate self entities.
Ill-being, the Causes of Ill-being,
the End of Ill-being, the Path,
insight and attainment,
are also not separate self entities.

Whoever can see this
no longer needs anything to attain.

Bodhisattvas who practice
the Insight that Brings Us to the Other Shore
see no more obstacles in their mind,
and because there
are no more obstacles in their mind,
they can overcome all fear,
destroy all wrong perceptions
and realize Perfect Nirvana.

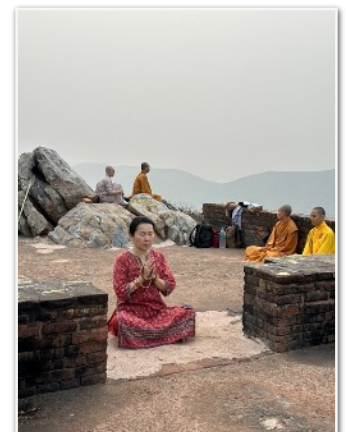
“All Buddhas in the past, present and future
by practicing
the Insight that Brings Us to the Other Shore
are all capable of attaining
Authentic and Perfect Enlightenment.

“Therefore Sariputra,
it should be known that
the Insight that Brings Us to the Other Shore
is a Great Mantra,
the most illuminating mantra,
the highest mantra,
a mantra beyond compare,
the True Wisdom that has the power
to put an end to all kinds of suffering.
Therefore let us proclaim
a mantra to praise
the Insight that Brings Us to the Other Shore.

*Gate, Gate, Paragate,
Parasamgate, Bodhi Svaha!*

*Gate, Gate, Paragate,
Parasamgate, Bodhi Svaha!*

*Gate, Gate, Paragate,
Parasamgate, Bodhi Svaha!*



2026年3月、ラージギルの霊鷲山に登った際、仏陀が座った場所で般若心經を唱えた

1989年のシンガポール。小さなインドと「永遠の夏」



◎忘れ得ぬ、異国で働くということの学び

シンガポールは、日本と同じアジアの国とは思えぬ多様性に満ちていた。英国統治時代の面影を残すコロニアル様式の白亜の建築物が目立つ一方で、漢方薬の香り漂うチャイナタウンや山積みの唐辛子やスパイスが店頭を賑わすリトルインディア、モスクからコーランの旋律が響くアラブ・ストリートが交差する。ヒンドゥー教のスリ・マリアマン寺院を訪れたときには、そのカラフルで賑やかな外観に、神聖な気分よりもむしろ楽しさを覚えたものだ。当時ほどのエリアも古びた建物が軒を連ねていて、それがエキゾチズムをより強くしていた。香水の匂いが漂う、冷房の効いたショッピングモールが林立するオーチャードロードを歩くよりも、遥かに楽しかった。

フランス、イタリア、スイス、ロシア、中国、インド、タイ、ベトナム、韓国、メキシコ、マレー系のニョニヤ料理……と、世界各地の料理店の存在も、この小国が抱える多様性を物語っていた。ハウカーセンターと呼ばれる屋台街の喧騒には心が沸き立った。シーズンだったドリানের強烈な匂いも記憶に鮮やかだ。何より心をひかれたのは、英国統治時代の名残であるハイティー。今となつては多くの人を知る、ランチとディナーの間のティータイムに、ケーキやスナックを楽しむ習慣だが、当時の日本では「アフタヌーンティー」や、さらに胃袋を満たす「ハイティー」の存在は、あまり知られていなかった。

このころのシンガポール旅行といえば1892年の創業以来の伝統であるティフィンルームが有名だった。本格的なインドカレーのブッフェが楽しめるランチ、そして夕方のハイティーが人気で、ぜひ行ってみたいと思った。しかし取材当時の1989年は、残念ながらラッフルズ・ホテルが一大改装中だったことから、グッドウッドパーク・ホテルのハイティーを取材した。しかし、このときは、写真撮影だけで終了。目の毒にもほどがある。後ろ髪を引かれる思いで、ホテルをあとにしたのだった。

最後に、忘れ得ぬ出来事を記したい。当時、高級日本料理店として有名だった「燦鳥（サントリー）」を取材したときのこと。ランチ営業を終え、傾き始めた陽光が差し込む店内で、従業員がカーペットに掃除機をかける中、黒いスーツに身を包んだ店長に話を聞いた。取材後、わたしは「海外でのお仕事はたいへんですね」といったことを、口にした。すると店長は、静かに語り始めた。彼は駐在員として赴任した当初、ローカル・スタッフが時間にルーズで、仕事が遅いことに不満を持っていた。ことあるごとに従業員を叱責していたあるとき、マレー系マネージャーに諭されるように、言われたのだという。

「あなた方駐在員は、数年間だけ、この暑い国で働いて、成果を出せばそれでいいでしょう。しかし僕たちは生涯、永遠の夏の中で過ごすんです。あくせく働いては、いられません」

「永遠の夏」という言葉に、店長は、我に返った。異国の地にも関わらず、自分たちの価値観を押し付けていたことに気づき、諸々を改善したのだという。このエピソードは、23歳のわたしの脳裏にも深く刻印された。不満に溺れそうになるときには、このときのことを思い出し「自分は異国で暮らし、働かせてもらっているのだ」ということを、肝に銘じている。

◎2度目の海外取材先はシンガポールとマレーシア

初の海外出張だった台湾からの帰国後は、それまで以上に苛酷な仕事が続いた。寝ても覚めても編集作業に追われていた昭和64年（1989年）が明けてまもない寒い朝。ニュースで、昭和天皇崩御を知った。翌日から平成時代がはじまったが、わたしの暮らしはいつもと変わらなかった。バブル経済のピークを迎えていた当時の日本は、不自然に浮かれていた。街ゆく若い女性たちは、手入れの行き届いた長い髪にボディコンシャスなワンピース、高級ブランドのハンドバッグを携え煌びやかだ。山口県下関市の大学に通っていたころ、同県創業のユニクロで買った安い衣類に身を包み、概ね疲労していたわたしにとって、浮世の趨勢は、遠くから聞こえる太鼓の音のようだった。

『台湾のガイドブック』が校了した直後、一息つくまもなく、シンガポールとマレーシアの取材を命じられた。どんなに多忙でも、海外出張に行けることは、うれしかった。取材前に不可欠なのは情報収集。書店や図書館、政府観光局などを訪れ、観光や歴史の情報、地図などを収集した。シンガポールは1819年、イギリス東インド会社の書記官だった英国人トーマス・ラッフルズの上陸を契機に、大英帝国による植民地時代が始まった。第二次世界大戦中の1942年に英国支配は終焉したが、代わって大東亜共栄圏の構築を目指す日本軍による占領が始まり、シンガポールは「昭南島」と改名された。シンガポールを象徴する高級ホテル「ラッフルズ・ホテル」は接收後、「昭南旅館」と呼ばれ、日本陸軍将校の宿舎となった。同国の日本統治は、1945年8月の日本の敗戦まで続き、以降は再び英国の支配下に戻った。完全に独立したのは1965年のことだ。

シンガポールでは、年上の男性編集者と外部カメラマン2名の計4人が2班に分かれ、朝から晩まで、観光地やレストラン、ホテル、ショップなどを片っ端から取材した。時効だろうから書くが、同行した男性編集者が取材先を分担する際、人気店や名店の大半を自分が担当し、残りをわたしに回した。今、当時のガイドブックを開けば、「チリ・クラブは、ほんと旨いよね」とか「フィッシュヘッド・カレーは最高」とか「ペーパーチキンは絶品」とか「あのチキンライスが抜群だった」といった彼の言葉が、35年以上経ってなお、鮮やかに思い返される。食べ物の恨みは恐ろしい。覚えている自分も恐ろしい。

アメリカ同時多発テロ。惑いながら、人生を見つめた日々。



25年前の9月11日、アメリカ同時多発テロが起こった。7月にインドで結婚式を挙げたあとも、それまで通り、わたしはニューヨークに、夫はワシントンD.C. 郊外のヴァージニア州アーリントンを拠点に、二都市を行き来する遠距離結婚生活を続けていた。あの朝、わたしはアーリントンの自宅で夫を見送ったあと、季刊誌『muse new york』の原稿を書いていた。9時40分ごろ、日本の父から電話があった。安否を気遣う父の声に戸惑っていると、テレビを見るよう促された。電話を切り、リモコンのスイッチを押す。画面に映るツインタワーを見て絶句した。窓辺に駆け寄りブラインドを大きく開く。ペンタゴンから、濛々と黒煙が上がっているではないか！ 米国の最高軍事行政機関である国防総省が、燃えている？！

夫に電話をするも繋がらない。直後、マンハッタンのイースト・ヴィレッジに住む友人に繋がった。わたしは画面越しに、彼女は肉眼で、黒煙を上げるワールドトレードセンターを眺めながら動揺を分かち合った。突然、南棟が崩れ落ちた。わたしたちは、悲鳴を上げることしかできなかった。あの日以来、寝ても覚めても、悪夢の日々が続いた。恐怖と不安、そして宙ぶらりんの仕事。ひとまずは、マンハッタンへ帰らねばと思い、9月18日朝、わたしはユニオンステーションからアムトラックに乗った。普段は満席の車両がガラ空きで泣けた。やがて、ニュージャージー州に入り、彼方にエンパイアステートビルが見えた。ハッとして視線を右側に移す。二つのビルが並んでいた場所には、何もなくて、うっすらと煙がたなびくばかりだ。

アッパーウエストサイドの自宅に戻り荷物を下ろしたあと、街に出た。目に飛び込んできたマクドナルドで遅いランチを取る。窓の向こうでは、何台もの消防車が、星条旗をたなびかせながら行き交う。向かいの店にも、その隣のビルにも、大きな大きな星条旗が翻っている。食後、少し街を歩き、買い物をした。あたりには、焦げ臭い匂いがほのかに漂っている。人々は静かで、街全体が「目には見えない」靄に包まれているようだった。家に帰り、ビルディングの屋上へ行った。わたしはここから、東西南北、眼下に広がるマンハッタンを見渡すのが大好きだった。夕暮れどき、西陽を反射してオレンジ色に輝く摩天楼の情景は殊更に美しい。しかし、この日を境に、感傷の質が変わった。遙か彼方、自由の女神が寂しく屹立する。ロウアーマンハッタンのあたりに、うっすらと白い煙が立ち上っている。ワールドトレードセンターと、二機の飛行機と、多くの人々を吊り上げるように。右上の写真は、その日に撮影した。

実は10月初旬、わたしたちはインドと日本の家族をニューヨークに招き、結婚披露宴をする予定だった。諸々の手配をすませていたが、もちろん中止した。わたしはといえば、自分の来し方行く末を熟考する日々が続いた。逡巡した結果、夫との生活を優先順位の上位に選んだ。2002年が明けてまもなく、わたしはニューヨークを離れてワシントンD.C. に移った。軌道に乗っていた仕事を縮小し、大好きなマンハッタンを去ることは、筆舌に尽くし難い悲しみだった。間接的ながら、我が人生の転機のひとつとなった、すさまじい出来事だった。

*2001年9月11日以降の出来事を克明に記録したブログ <https://museindialibrary.blog/2021/09/11/911/>

Editor's Note 編集後記

先取りをせず、経験を残す月刊誌として

8月号のテーマは戦争だったこともあり、少し重い内容となりました。しかし日本とインド、両国の友人たちの反響も多く、自分の家族の経験談をシェアしてくれる人もいて、新たな学びを得られました。月刊誌は情報を前倒し提供するのが一般的ですが『サラスヴァティ』は情報を先取りするのではなく、わたしが経験したことを中心に、歳月を重ねても色褪せない誌面作りを続けます。

今号の前半は歴史の教科書のようにになりました。わたし自身がインドと日本の関係を学ぶうえで、事象を断片的に拾うのではなく、時代の流れに沿って学ぶ方が、理解しやすいと実感していることから、このような構成にしてみました。過去を遡るほどに、芋づる式に見つかる日本とインドの関わりを、これからも少しずつご紹介します。

2026年9月14日 ガネーシャ祭りの日に
坂田マルハン美穂

『サラスヴァティ』の英語版、日本語版、バックナンバーなどは、ここからダウンロードできます

